

+ 6 2 【へたれ】

「かいじい、くさくないかのう」

「くさいですか、金ちゃん」

「くさくてたまらんのう」

「すいませんねえ。わたしは何十年も、風呂にはいっていませんからねえ」

「かいじいのにおいには、なれとる。これは、おならのにおいじゃ」

「わたしはおならするほど、食べていませんからねえ」

「かいじいがはんにんとは、いとらん。においはあっちのみちのほうからじゃ」

「ああ、〈桜の花道〉といわれている、あの道ですね。牛が糞でもたらしめましたかねえ」

「うしやうまの、ふんの、においには、なれとる。これは、なれとらんにおいじゃ」

「ははあ、【へたれ】ですかね。一年にっぺんしかでてこないんですが、もう一年経ちましたかねえ」

「【へたれ】というおぼけかい。へをたらすおぼけで、へたれたあ、たんじゅんだのう」

「まあそうです。単純におならが臭いだけのおぼけですから」

「それにしても、あのひどいにおい、なんとかならんのかのう」

「金ちゃんが自分で、話をつけたらいいんじゃないですかね」

「どうはなしつけるんじゃ」

「それはまあ、出たところ勝負ですかね」

「そんなら、とくいじゃ」

「では〈桜の花道〉へ、いってらっしゃーい」

「おうい、【へたれ】よ、でてこいや」

「ぼくを呼ぶのは、もしかして昔なじみの【くされ】ですかい」

「【くされ】じゃねえ。わしじゃ」

「もしかして幼なじみの【くそったれ】ですかい」

「ふざけるな。きんちゃんだよ」

「金ちゃんなら金ちゃんといってくださいよ」

「おしをしっとるのか」

「おぼけの世界で、金ちゃんをしらないものは、もぐりですよ」

「そうかのう、そうかのう、うれしいのう、うれしいのう」

「それでは金ちゃん、さようなら」

「【へたれ】まてや。おまえ、ふんころがしみたいな、ちっちゃなからだ
で、ようもまあ、そんなにくさいおならがでるのう」

「臭い人間の臭い世の中の臭い空気を吸つとると、臭いおならがでない
ほうがおかしいでしょう」

「それにしても、くさすぎるのう」

「金ちゃんたら。教室でおならばかりして、【おおへたれ】って陰で呼ば
れてるの、しらないんですねえ」

「わしが【おおへたれ】じゃと。しらんしらん」

「同級生はみんな優しいから、というより、金ちゃんがひどく怖いもん
だから、金ちゃんにいけないで我慢してるんですねえ。かわいそうに」

「わしのどこがこわいんじゃ」

「怖い怖い。おぼけより怖いです」

「なんたるぶじょく」

「誉（ほ）めているんですよ。おぼけを怖がらない人間ほど怖いものは
いません」

「わしのおならは、そんなにくさいんかのう」

「とても人間のおならとはおもえません」

「なぜかのう。なんとかならんのかのう」

「蛙の干物ばかり食ってるせいですね。蛙の干物は控えて、蛇の干物に
するといいですよ」

「ようわかった。そうするぞい」

「本当に良かったです。それではさようなら」

「まてまて。まだまだはなしあるぞい」

「ぼくは忙しいので、このへんで失礼しますよ」

「おいおい。もしかしておまえは、かえるのおぼけじゃなかるうな」

「蛙がなくから、帰ろ」

「またあえるかのう」

「臭いぼくでも会ってくれるんですか。鼻がまがりますよ」

「おたがいさまじゃ」

「それでは来年の桜の季節に、〈桜の花道〉でおあいしましょう」

「だば、さようなら」

「はい、さようなら」